

# 天主の御母 聖瑪麗亞（翻譯）

高田 友

インターネットに見出したる「Products Mary - King Richard's Liturgical Design and Contracting」を翻譯せり。原文を検索せむには「The Virgin birth of Jesus was an almost universally held belief among Christians from the 2nd until the 19 century.」と打ち込みてクリックするが便なるべし。

扱、本朝独自の儀なれど、「マリア」なりや「マリヤ」なりやの諍ひあり。希伯來語にては Miriam（ミリアム）なれど、これを希臘語にて Maria と受けたりき。i は y に近きに據りて、邦語にては「マリヤ」とするが原音に忠實ならむかと思はるる。

「マリヤ」は耳に馴染みなければ暫く措かむ。然則、「マリア」「マリヤ」いづれも理あるべし。然れども、由來本朝の言靈には、ia の如き母音連續を嫌ふの儀ありて、「わが」も（wagaimo 我妹）は「わぢも（wagimo）」、「近江」は「淡海（淡水湖）」の義にて「あはぐみ（apagumi）」なりしが、apagumi ⇄ apumi ⇄ afumi ⇄ aumi と轉じて、「オーシ」と發音せらるるに至る。於是歟、某は「マリヤ」を推奨仕る。

中國語にては、「馬利亞」もしくは「瑪麗亞」と稱へ奉る。「亞」を用いたれば、「ヤ」ならで「ア」ならむと思ひきや、現代北京音にては「亞」字は「ヤ」の音なり。

Russia も「露西亞」なれば、「ロシア」ならで「ロシア」なり。

本稿にては、「瑪麗亞」と表記す。「マリヤ」と讀み給へかし。

「神の母」（希臘語 Theotokos）なる瑪麗亞の稱號は、四三一年、第一回エフェソス宗教會議にて確認せられたり。會議催されたる教會の名を聖瑪麗亞教會といふ。（譯者註：聖母はエフェソス〈現トルコ南西部〉にて被昇天せられたりとの説有力なり）このとき定められたる教義に據れば、瑪麗亞を神の母と申し上ぐる所以は、其の一つ兒耶蘇、神性と人性とを具へたればなり。該の教義は、キリスト者に廣く認諾せられ、「神の母」なる語

は、瑪麗亞に捧ぐる最古の祈禱「スブ・トゥウム・ブラエシディウム」(SUB TUM PRAESIDIUM<sup>ラテン</sup> 羅旬語「御身が庇護の下に」)の中に既に用ゐらる。さは大略紀元二五〇年の儀なりき。

耶蘇の處女懷胎はキリスト者の間にて、二世紀より始まり十九世紀に至るまで、遍く信じられたりき。抑々キリスト教の古來の信條(信仰告白)に三つあり。ニケーア信條、アタナシウス信條、使徒信條、これなり。いづれもいづれも、處女懷胎を史實なりとし、就中ニケーア信條にては、耶蘇は「聖靈と處女瑪麗亞に由りて人となり」と敘述せらる。マタイの福音書にては、瑪麗亞の處女にてあらせらるるは、イザヤ書七章十四節の預言を全からしめんが爲なりと説く。ただ、さは、希伯來語の *alma* (若き女) を希臘語にて *parthenos* (處女) 神殿バルテノン *parthenon* と同根(該神殿は處女神アルテミスを祀る)と誤譯したるより來たるとの解釋もあり。マタイ、ルカの福音書の兩著者は、耶蘇の受肉は性の交はりの然らしむる所にあらずと言ひ、瑪麗亞は耶蘇の誕生以前に男子と結ばれたるの條なかりきと教ふ。換言すればすなはち、瑪麗亞の耶蘇を懷胎したまひしは、神および聖靈の所作に據る所にして、約瑟ヨセフならむと他の男子ならむと、悉皆しっかい身を任せ給ふの儀なかりき。

瑪麗亞の被昇天(カトリック)もしくは就寢(東方正教會)の教義は、逝去せられて、天に召喚せられたるを言ふ。(譯者註…カトリックにては聖母は命あるままに天に引き上げられたりと解き、東方正教會にては、逝去してすなはち天に召されたるにして、「就寢」とは死の謂ひなり。また、耶蘇は自らの力以て天に昇りたれば「昇天」と言ひ、聖母は神によりて引き上げられたれば「被昇天」と申す) ローマ・カトリックにては一九五〇年、教皇ピオ十二世被昇天の教義を公にす。然れども、その際、瑪麗亞の死に就て言及ありと雖も、死に給ひたりや、さならずやの儀に及びては、確定せらるることなかりき。

東方正教會にては、處女瑪麗亞の被昇天を信じ、其の就寢とともに奉祝す。換言すれば、死して後に蘇へりたまひしところは爲すなれ。

カトリックは、瑪麗亞の「無原罪の御宿り」を信ず。御母（アンナ）の胎内に宿りたまひしより恩寵に満たされ、原罪の汚穢をみを免れたりとは、一八五四年、教皇ピオ九世の宣したる所なり。羅甸教會（カトリック正統派）には、「無原罪の聖瑪麗亞」なる祝日ありて、十二月八日に定めらる。東方正教會は「無原罪の御宿り」を斥くるが、さは、「先祖の罪」（希臘語にて羅甸教會の原罪に相當す）の解釋に關して、アウグスティヌスおよび羅甸教會に異を立つる所あればなり。

「瑪麗亞の永遠の處女性」の信仰は、瑪麗亞は眞實處女にましまし、且つ又生涯處女にあらせられたりとす。神の子を人として出産せられたりと雖も、争やばか其の無垢損なはるるの由あるべけん。瑪麗亞を Ever-Virgin（希臘語 Aeiπαthenos）と呼び奉るが、茲許こゝもと「永世處女」もしくは「常乙女とこをとめ」と譯してむ。その謂いひや、生ある限り處女にておはしまし、生みたまひけるは一人耶蘇のみとの儀なり。耶蘇の懐胎と誕生を奇蹟と爲すの所以なり。聖書は耶蘇に兄弟姉妹ありしと述べれど、東方正教會は約翰ヨハネの原福音書を引き、其の義を説いて曰く、約瑟ヨセフは瑪麗亞を娶る以前に先妻あり、渠死かれして鰥夫やもめと成れども、すでに子ありきと。（すなはち耶蘇の兄姊なり） また、ローマ・カトリックにては、教父ジェロームの説に隨ひて、さは耶蘇の從兄弟なりきと教ふ。

（令和四年四月二十七日受附）